

週刊センターニュース No.245



第245号(2009年2月16日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第212回共同学習会のご案内 ○●○

日時: 2月19日(木) 15時30分~17時(開催時間が通常と異なりますので、ご注意ください)

会場: 角間キャンパス総合教育1号館2階大会議室

報告者: 梅本 嗣 氏(株式会社 博報堂)

テーマ: 「出口から見た秋季(9月) 入学制および大学教育」

趣旨: 当センターは科学研究費に基づく基盤研究(C)「学習意欲を高める授業科目が教育成果全般に及ぼす影響とその評価」(研究代表者: 青野 透)において、授業科目と学士課程において設定すべき人材育成目標との関係について研究を進めているが、企業等出口から見た大学教育の成果の評価、人材育成目標の観点からの秋季入学を含む入試制度やインターンシップの設計等に関心を持っている。今回は、本研究の一環として、企業が求める大学の人材育成目標や入試制度に関する豊富な調査研究の実績をお持ちの梅本 嗣氏(博報堂)をお招きし、特に秋季入学制度とそれに伴う大学教育プログラムに対する企業ニーズの最新の動向についてご講演をお願いします。

○●○ なぜ、授業方法を見直さねばならないのか、どう変えねばならないのか ○●○

この原稿を出張先の沖縄のホテルで書いている。昼食はホテルのフロントで勧めてもらった、沖縄そばの店で済ませたが、その店に置いてあった地元紙の記事で次の文章に出会った。「佐佐木幸綱さん(早稲田大学)最終講義・・・最後に佐佐木氏は『大学や大学院の教室は、教える場ではない。教師は実演する人。ロッククライミングに例えると、ここで登りっぷり、失敗ぶりを見せるんです』と語った」(『沖縄タイムス』2009年2月16日付け)。

ここに現れた授業観に注目したい。当センターニュースでも授業改善研究の必須テキストとして紹介してきた、金子元久『大学の教育力』(ちくま新書、2007年)では、36頁以下で、授業のプラクティスには二つのタイプがあるとする。

「学生はすでに大人なのであるから、・・・よい教育とは最新の研究成果にもとづいて、学生に知的な刺激を与える、という意味でのよい講義にはほかならない。学生はそうした講義に触発されて、自立的に学習を進めることによってこそ、高度の知的・人格的能力を実現することができる。学習の成果は最終的な試験によって確認すれば良い。これを『自律志向』と呼んでおこう。」

「学生を成長途上の未完成の存在にとらえるなら、・・・授業の意図を確実に実現し、教育内容を身につけさせるためには、一方的な講義だけでなく、学生の学習過程にたちいって、それを恒常的に制御する姿勢が必要となる。そのためには、学生の学習の過程を補助、監視するためのレポート、厳格な成績評価などの一連の工夫・手段が考え出される。『制御志向』と呼んでおこ

う」

学生観が、成績評価の方法を含めた授業観まで規定するという指摘である。これを前提にすれば、冒頭の佐佐木教授の発言には（その専門分野の特性にもよるのだろうが）、制御志向的な教育への批判を読み取ることができるのではないかと思う。

ここまで書くと、14日の当センター主催の第6回大学教育セミナーに参加された方々は、セミナーのテーマが、まさに上述の二つの授業観の接点を模索するものであったことを思い起されると思う。160名以上の参加を得て行われたセミナーの内容の詳細は報告書（年度内に作成予定）に譲ることとするが、ここでは、私が質疑応答で、＜学生の多様性という事態に直面し、クリッカーという応答技術を活用することで一つの打開策を得た気がする＞とだけを発言したことを記しておきたい。

学生の新しい多様性をもとに、FD=授業研究をしなければならない。学力が低い、あるいは、進学動機が不明確な学生が目立つ・・・ということへの対応と併せて、障害ゆえに一定の配慮・支援をしなければ十分な受講ができない学生が教室にいるという場合を想定した授業方法も知っておかねばならない。（セミナーの報告でも強調したことだが）どのような学生観・授業観に立とうと、どのように立派な内容の講義ノートで授業に臨もうと、その内容が学生に伝わらなければ、理解されようはずもない、そして支援を受けなかった学生には無意味である、という当たり前の事実の認識が重要である（したがって、自律志向だけでは授業はたちゆかない）。

13日に私は、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された平成20年度国立特別支援教育総合研究所セミナー「発達障害のある子どもの支援を考えるーこれまでとこれからー」に参加した。後期中等教育から高等教育への接続をどうすべきなのか、議論が行われたが、高校での事例報告により、問題の所在がかなり明確になった。授業で配慮すべき事項は、高校でも大学でも共通するところが多いと思われる。また、15日に当センターと日本学生支援機構北陸支部の共催で、いしかわシティカレッジで開いた「平成20年度聴覚障害学生情報保障講習会」では、太田晴康・静岡福祉大学教授の「実習授業における障害学生支援、留意点と課題」などにより、すでに大学教育のインフラとなりつつあるノートテイクを、授業の形態に即したよりきめ細かな情報保証にしていく段階に入ったことが示唆された。改善方法を考えるためには、まず、対象となる自分の授業を対象化、客観化しなければならない（クリッカーの登場である）が、同時に、こうしたセミナー等で、（高校教諭を含めた）他の教員たちの授業改善努力に学ぶことが大事になる。

さて、明日は沖縄キリスト教学院大学を訪問する。「沖縄を国際的平和の島にする」ことを建学理念とする大学が優れた障害学生支援に取り組んでいると聞く。どんな教職員・学生の方々に出会えるか、楽しみである。
(教育支援システム研究部門 青野 透)

〇〇〇「アカンサス SD」について〇〇〇

SD カレンダー（2009年度学外開催情報および学内開催情報）を掲載した「アカンサス SD」がポータル内にあります。また、「アカンサス SD」「アカンサス FD」ともに、教員だけでなく職員の方々の能力開発に役立つ資料（大学職員に関する研究会、文献など）を掲載・更新しております。是非ご活用下さい。